

# 少子時代の親子の世界

馬居政幸



灯台ブックス113

灯台ブックス

113

少子時代の親子の世界

馬居政幸

第三文明社



9784476021134



1925037008005

ISBN4-476-02113-1

C5037 ¥800E

定価 本体800円 +税

第三文明社

# 少子時代の親子の世界

馬居政幸



灯台ボックス113



著者の言葉

馬居政幸

子育てにとまどうお父さんやお母さん、そして子どもたちの健やかな成長を願う全ての人たちに、四人の子どもたちに学んだ“元気の素”をお届けします。

## まえがき

家庭の教育力が低下している、という話をよく聞きます。そのためか、子育てをテーマにした講演会で非常に熱心にメモを取りながら聞いておられたお母さんから、講演終了後に自分が子育てに向いていないのでは、と相談され驚くことが少なくありません。あるいは、子育て講座に積極的に参加するお父さんに出会う機会が多くなりました。そのことは喜ばしいことなのですが、すこしひねくれた見方をすれば、それだけ父親としての自信を持っていない、ということになるのかもしれない。

しかし、本当に昔の家庭は立派で親は自信満々だったのでしょうか。実は昔も自分は母親として失格なのは、と悩む女性はいたのですが、姑の目と口を気にして言えなかっただけのことではないでしょうか。父親の場合はもっと単純です。子育てを自

分の役割と思わなかったかもしれません。「貧乏人の子だくさん」という言葉に象徴されるように、次々と生まれる子どもを食べさせるだけで精一杯、どのように育てるかといったことを悩む余裕がなかった、というほうが正確かもしれません。

逆に、「少なく産んで、良く育て」ようとするからこそ、子どもの育て方が問題になるわけです。家庭の教育力低下や親の子育て不安が話題になるということは、むしろ、現代の家庭には教育力を高める可能性があることを示唆しているともいえます。全く可能性のないところを問題にしてもしかたがないわけですから。良くなるうとするから、不安も生じます。自信がないから、努力も生まれるわけです。

少なくとも、現在、大学二年（長男）、高校一年（長女）、中学二年（次男）、小学校六年（次女）の子どもの母親である私の妻は、自信があつたから四人の母親になつたではありません。特に、長男のときは不安のみであつたと思います。

長男が小学校に入学する前のことです。一緒にテレビの報道番組を見ていた妻が、静かに、しかし力強く情感をこめた声でつぶやきました。

「そうだよね、よくわかるわ、私だつてこうなるかも……」

若いお母さんが子育てに悩み、自分の子どもを傷つける、という内容でした。

逆に、もし、一人か二人の子どもを夫婦のみで育てているにもかかわらず、子育てに自信があるといわれる方がおられたら、私はそのこと自体に不安を抱きます。あるがままの現実を受け入れ、それを素直に表現できることが子育ての基本であり、未経験な親の思いに応えて行動してくれるほど、子どもは甘くないからです。

おしめをかえ、風呂に入れ、乳を飲ませることを毎日繰り返すことがどれほど重労働か。おまけに、そのような親の苦勞を全く意に介さず、勝手気ままに泣き叫び、ところかまわずひっかきまわすのが子どもです。わが子、とりわけ最初の子ほど、理不尽<sup>レ</sup>という言葉が似合う存在はない、というのが四人の子どもたちと格闘してきた私のいつわらざる実感です。

やはり長男が二歳になった頃のことです。近所の焼き肉屋さん親子三人で食事に行き、並んだ料理に箸をつけようとしたその瞬間でした。長男が突然私の膝を踏み台

にしてテーブルの上にはい上がりカルピクツパが入ったどんぶりをひっくり返したのです。それからの騒ぎは想像できるでしょう。飛び散ったご飯と汁、泣き叫ぶ長男、悲鳴をあげる妻……食事どころではありませんでした。多分、読者の中にも同じような経験をした方も多いと思います。

最近の親は、と家庭教育の現状を批判する言葉や文章に出会うたびに、私はこの時の気分を思い出します。そしてその内容が子ども二人を夫婦のみで育てること、すなわち「少子時代」の子育ての経験を踏まえたものでなければ無視します。

でも、なぜそんなに大変なのに、二人ならともかく四人も子どもをもうけたのか、と疑問に思われる方もおられるでしょう。その答えは簡単です。苦しくて、いやなことはいっぱいあるけど、楽しくて、うれしいこともいっぱいあるからです。本当に子どもを育てている方であれば、子育てに不安を持たないほうがおかしいと思います。でも、それでも子どもは可愛いのです。むしろ逆かもしれません。自信を失いがちな私ども夫婦に「元気の素」を贈り続けてくれたのが、子どもたちでした。

このことを伝えたくてこの本を書きました。

時代と社会が大きく変わりつつあります。子育てが困難な社会であることも否定できないでしょう。でも、だからこそ得られる喜びもまた大きいと考えます。その醍醐味を「少子化」を切り口に解きほぐしてみました。これが第一部です。

本書は理想的な子育ての方法を説いたものではありません。命を与えるきっかけをつくったのは私と妻ですが、夫婦から父母へと成長させてくれたのは四人の子どもたちのほうです。その六人の親子の生きる世界を綴ったのが第二部です。

子育てに模範回答はありません。私ども夫婦の拙い経験を、読者の皆さんがそれぞれ素晴らしい親子の世界を描くための一助にしていただければ幸いです。

子育てにとまどうお父さんやお母さん、そして子どもたちの健やかな成長を願う全ての人たちに、四人の子どもたちに学んだ「元気の素」をお届けします。

●目次—**少子時代の親子の世界**

まえがき…………… 3

## I 難しい少子時代

- (1) 子どもと高齢者並ぶ…………… 17
- (2) 巨大な発行部数…………… 22
- (3) 子どもが半分になる…………… 26
- (4) なぜ少なくなつたのか(1)…………… 33
- (5) なぜ少なくなつたのか(2)…………… 39
- (6) 何が変わったか…………… 45
- (7) みんな高校や大学へいけるようになったけれど…………… 50
- (8) 何が失われたか…………… 54
- (9) 自立のために必要な力は…………… 63

⑩ 男女の自立への道は…………… 71

⑪ ジャンプワ ルドの秘密…………… 80

⑫ 女性が産まない理由…………… 85

## II 新しい親子の世界

- (1) 子ども同士の豊かな関係を…………… 95
- (2) 変化する「学校のモノサシ」…………… 100
- (3) 親の役割は「モノサシの発見」…………… 103
- (4) どんどん変わる子どもの能力…………… 106
- (5) 「反抗」は正常な成長の証拠…………… 109
- (6) 創造し続けよう「親子の関係」…………… 113
- (7) 懸命に生きる姿のモデルに…………… 116

- (8) 互いの違い認め秩序づくり…………… 119
- (9) 情報を共有、役割を明確化…………… 122
- (10) それぞれの家庭に独自の形…………… 125
- (11) 右往左往した二、三十代…………… 128
- (12) 異質との交わりが成長の契機…………… 132
- (13) 父親の姿が見えていますか…………… 135
- (14) 子どもとの距離を短くする工夫を…………… 138
- (15) 願いを形容詞に託して…………… 141
- (16) 正月は絶好の機会…………… 144
- (17) 上がりぬ出生率、時代が求めるものは…………… 148
- (18) アジアに育つ若い力…………… 150

- (19) 家族はどうかかわるか…………… 154
- (20) 看板、ゴミ箱、大型遊具…………… 157
- (21) 仲間づくり、ストレス発散の効用も…………… 160
- (22) 総合性、創造性、自主性…………… 163
- (23) 親のネットワークから…………… 166
- (24) 学歴社会と日本型経営が崩壊へ…………… 170
- (25) 大きな理想に生きる豊かな時間を…………… 174
- 参考文献…………… 178
- あとがき…………… 179